

## 「鶴見良行と大地の声」

平成10年入学 加川 真美

南スラウェシ州での旅は常に鶴見良行の『海道の社会史』[鶴見 1987年]と共にあった。乗り合いのバンは、私たちを乗せて南スラウェシ州の州都ウジュンパンダンからボネ湾に面した漁港のシンジャイに向け海に沿って沿うような道を快調にとぼしている。私はくるくると変わる風景に目を奪われていた。ずっと熱帯地域で調査を続けていたにも関わらず、である。なぜ目を奪われていたか。鶴見の言葉の「私が南スラウェシのいりどり豊かな風景に驚嘆したのは、これまで植民地主義が深く入った土地を歩いてきて、プランテーションの景色を見すぎていたかもしれない。」という表現が、私にもあてはまっていたからだ。南スラウェシ州では道ばたでコメを干している農民がいるかと思えば、少し進めば同じように道ばたでカカオを干している農民がいる。車の進行と共に刻々と風景が変わる。

私の調査地のフィリピン・ネグロス島はサトウキビプランテーションの島である。2月から4月にかけては、サトウキビを満載した製糖工場に向かう大型トラックがハイウェイを南から北にひっきりなしに走る。サトウキビのほとんどは東ネグロス州の北部か、西ネグロス州にある製糖工場へと運ばれる。平野部の多くは大地主が持つサトウキビプランテーションである。バスに乗って走っても、行けども、行けども、サトウキビである。プランテーションを農業労働者に開放する農地解放の進捗は遅々としている。ハイウェイの沿線に延々と続くサトウキビ農場のごく一部がモザイク状に水田などに変化している。それを見ると、ここは農地解放されたのかなとうれしくなる。ネグロス島とはそんな場所だ。

今回の調査では、ネグロス島ではちょうど島の中央部のハイウェイ沿いに、最近になって住民が土地を手に入れたという農場に出かける機会を得た。1987年にアキノ政権によって施行された包括的農地解放令から早22年が経過している。だがそのなだらかな丘陵部の農業労働者が土地を耕せる公的な権利を手に入れたのは、2008年の11月である。それまでは、ずっと地主側のハラスメントが続いた。なんとゆっくりした変化であろうか。

そんな土地の単一の平野の風景を見慣れた12年は、同時に低地のプランテーションとはくっきりとした対比をなす山間地に、ささやかな小農民による野菜栽培や花卉栽培みいだせたことに満ち足りた喜びを感じてきた12年でもあった。小さな島の小さな世界である。それゆえ鶴見の「植民地主義の残した単調な風景を見慣れてきた私は、いりどり豊かな南スラウェシに一驚した。」(前掲書)という言葉はまさに私の言葉でもある。

帰国後の報告書を書く段になって、1982年6月に発刊された『東南アジア研究』20巻1号“特集南スラウェシの村落と農業景観”を読んだ。そこには南スラウェシの土壌や気候と人の動きがうまくかみ合い展開してゆく農事暦や、農耕の歴史とでもいえる、農耕の系譜から農業が読み解かれていた。農業景観が読み解く尺度が、私が持っていた土地所有を基準とした縮尺と全く違っていた。

鶴見は「東南アジアの風景に単調さを与えたのは、最初にはプランテーションである。

彼らは、住民にたいしてだけでなく、自然にたいしても単一を要求した。このことは熱帯雨林の性格を考えるとよく分かる。熱帯雨林の大きな特徴は、樹木のバラエティーの豊かさである。一ヘクタールに同じ樹種は二、三本しかない、といわれるほどだ。そこがゴム、サトウキビなど単一の作物に塗り替えられた。もし自然にして心あれば、いかばかり苦痛だっただろうか」(前掲書)。

だとしたら私は、人と大地の悲鳴が聞こえる小さな島で、つかの間の樂園を夢見ていたに過ぎないのか？だが、大地の悲鳴は、今では東南アジアのそここで聞こえる。マレー半島でゴム農園を押しよけるようにうんざりするほど広がったアブラヤシ農園は、インドネシアのカリマンタンに人が入植していった後にも続いている。南スラウェシ州の前に向いた、東カリマンタン州にも入植農民によるアブラヤシプランテーションが広がりつつあり、その風景からも引き裂くような悲鳴が聞こえた。

だが風景からだけでは分からないこともある。南スラウェシ州ゴア県のバンカラエン山麓の麓部標高 1,300m~1,500m に広がる丘陵地で野菜作が盛んな土地に出かけた。同じ野菜作りの村と言っても広い。私のフィリピンの調査村では均分相続が繰り返され、年々耕地面積が縮小し、農業生産を続ける事が不可能な世帯も増えてきた。そこでは、南スラウェシ出身の住民と、高値で売れる野菜作りに取り組もうと西ジャワから移ってきた住民が共存していた。南スラウェシ出身の住民は西ジャワ出身の住民に土地を分け、西ジャワ出身の住民は野菜作りの技術を南スラウェシ出身の住民に分けていた。1世帯の平均耕作面積 2ha。私の調査村の 1ha~10a とは比べものにならないくらい広い。そこでは農業が自然環境に調和的で、生産技術も高くうまくいっているように見えた。農地から見える部分については。

だが、夜に泊めてもらった農家でいろんな話を重ねてゆくうちに、実はマーケティングのほとんどは華人系の商人に握られていることを知った。また、栽培している野菜の種は日本の種苗会社のものだった。風景からだけでは見えない、農民の小さい悲鳴がそこから聞こえる。また、バンカラエン山麓では、大きな地滑りも起き、農地が押し流され死傷者も出たことも耳にした。

私たちは、調査の締めくくりにウジュンパンダンにあるハサヌディン大学でセミナーを持った。そこで、私はフィリピンの調査村について発表したのだが、その時聴衆の学生から尋ねられた問いにうまく答えることが出来なかった。その問いとは「あなたの調査から、ゴア県の野菜生産地に何かアドバイスできることはありませんか」というものだった。いまならこう答えるだろう。「マーケティングを農民達が行えるような協同組合などの設立はどうですか。また、バワカラエン山麓では2004年に地滑りなどの大災害が起きたとのこと。山間部といった耕作限界に近い地形の農業では、もっと大地の声に耳を傾け、直接お金にならない水源涵養林としての植林を、行政などが主体となって行う必要があると思います。」と。フィリピンは大地の悲鳴も大きい、民衆の声も大きい。協同組合もすべてが順調にしているわけではないのだが、とにもかくにも農地を地主からとりもどすために彼らは組合を作って声を上げる。大地の悲鳴を、民衆が代弁するかのよう。またフィリピ

ンは行き過ぎた森林伐採のために、数々の水害などの大災害に見舞われてきた。そのため近年は、特に水源涵養林の造成に行政と民間が一体になって力を入れている。フィリピンでの取り組みを例に、その場でそう答えられなかったことが今回残した悔いの一つである。そして、自分の知っていた東南アジアがいかに狭い範囲のものだったかを思い知り、また自分の調査地が大地の悲鳴が聞こえる場所だったのを知った調査であった。

鶴見良行『海道の社会史』朝日新聞社 1987年

京都大学東南アジア研究センター『東南アジア研究』20巻第21号,1982,6月

(特集“南スラウェシの村落と農業景観”)

アクバル・アブ・タリブ「バワカラエン山の守人、ダエン・マンドン」『アジア研ワールド・トレンド』No143

JETRO 2007年8月 翻訳・解説 松井和久



製糖工場へ向かうサトウキビを満載した  
ネグロス島のトラック



ネグロス島山間部の野菜生産



南スラウェシ州ゴア県の野菜栽培地



地元のパサール（市場）での野菜の商い



ゴア県の野菜の多くはこのようにまとめられ仲買業者の手を経て島外へと渡ってゆく